様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２００１２

研究課題名（和文）京都学派の哲学と現代仏独哲学の並行研究を通した宗教哲学の歴史哲学的再考察の試み

研究課題名（英文）Reconsideration of Philosophy of Religion through Philosophy of History: Kyoto School and Contemporary French and German Philosophy

研究代表者
杉村　靖彦（Sugimura, Yasuhiko）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：２０３０３７９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1930年代から40年代にかけての後期西田哲学と中期田辺哲学を、同時代の仏独の諸哲学との哲学的・歴史的諸問題を共有する様子に着目して考察し直した。とくに、この時代のフランスにおける、ヘーゲルやハイデガー、マルクスの独自な受容とベルクソンやフランス社会学派の問題系との絡みあいを参照することによって、西田や田辺がこの時期に形成しようとした歴史哲学に潜む哲学的潜勢力を探り当てることができ、それを通して彼らが模索していた宗教哲学の可能性と問題点を考察することができた。

研究成果の概要（英文）：This research project attempted to reconsider Nishida's later philosophy and Tanabe's middle philosophy by paying attention to the problems they shared with their contemporary French and German philosophical currents. Singular reception of Hegel, Heidegger and Marx characterizing France at that period and its encounter with Bergsonian philosophy and French sociological School was of special importance for us. Through exhausted research on this point, we could shed light upon philosophical potentials reserved in Philosophy of history of Nishida and Tanabe and Philosophy or religion they were trying to elaborate from that point of view.

研究分野：哲学・宗教哲学(現代フランス哲学と京都学派の哲学を発想源とした今日の宗教哲学の構想)

キーワード：西田幾多郎　田辺元　ハイデガー　ベルクソン　フランス社会学派　歴史哲学　宗教哲学

１．研究開始当初の背景

研究代表者は長らく現代フランス哲学を専門的に研究し、それを通して「現代の宗教哲学」のあり方を探る思索を遂行してきた。他方で、京都学派の哲学の伝統を濃厚に受けつぐ京都大学の宗教学専修で学び、教えてきた者として、西田や田辺の思想に有形無形の示唆を受けてきた。現代フランス哲学からの宗教哲学研究に一応のまとまりがついてきた 2006 年頃から、それと深く交差させつつ西田や田辺の思索を再活用し、その成果をも「現代の宗教哲学」の構想へと組み入れていくための道が見えてきた。

そうして、本研究開始までの 5 年間は、フランス哲学と日本哲学を交差させて独自の道を開こうとする試みをフランス語圏の哲学研究者たちとのシンポジウムや共同研究において積極的に発信し、その反応をフィードバックさせるという仕方で自らの研究を展開してきた。そうした中で、とくにＦ・ヴォルムス（高等師範学校・リール第三大学教授）やＥ・カタン（クレルモン＝フェラン大学教授）らとの継続的な交流から育ってきたのが、京都学派の哲学を 20 世紀の哲学・思想史全体の流れの中に置き入れ、西田や田辺がとくに同時代のドイツ・フランス哲学と最前線の哲学的問題を共有しながら独自の仕方でそれに応答してきた様子を浮き彫りにするという課題であった。

これは単に過去を整理するためだけの、後ろ向きの作業というわけではない。京都学派の哲学を単に「日本」という特殊な枠組の中で紹介するのではなく、非西洋圏に発する西洋哲学の独自な受容と語り直しの企てとしてもつその潜勢力を掘り起こし、それを西洋の哲学研究者との共有物とするための準備作業として、そうしたプロセスが不可欠だと考えてのことである。

以上のような経緯から、世界恐慌後の「危機」の時代から第 2 次大戦までの 1930・40 年代に焦点を当て、そこでの西田や田辺の「歴史的世界」をめぐる思索を、同時代のヨーロッパ哲学とさまざまな点で問題意識を共有していることを解き明かしつつ考察し直していくという本研究の課題が具体化してきた。

２．研究の目的

本研究が目的としたのは、1930・40 年代の西田と田辺を始めとする京都学派の哲学を、同時期の仏独哲学のいくつかの形態と交差させつつ並行的に研究することによって、双方が深く触れあう思考空間を「宗教哲学と歴史哲学の絡みあい」という姿で浮かび上がらせ、その可能性と問題性を考究することである。

この時期以降、第二次大戦での日本の敗戦を経て、京都学派の哲学の歴史哲学的側面は顧みられなくなり、ある意味では歴史哲学からの撤退とひきかえに、宗教哲学としての側面に重心が置かれることになった。だが、今日から振り返ってみた時、この時期の西田や田辺の「歴史的世界」をめぐる諸考察からは、宗教哲学を非歴史的な営為にとどめ置かずにその歴史性を踏まえて再考察するという現代的な課題に呼応しうる諸々の力線を読みとることができるのではないか。これが本研究を導く見通しであった。

３．研究の方法

(1) この時期の西田・田辺哲学の基本的な姿を両者の相互影響を意識しつつ辿り直し、両者の思索の根底に、弁証法的身体性を歴史的世界が生起する原‐条件として位置づける独特の身体理解があることを浮き彫りにする。その構図の下で、西田の「歴史的身体」論と田辺の 1930 年代初頭から「種の論理」期にかけての身体論を読み解くとともに、それらを同時期の仏独哲学においてさまざまな文脈で現れてきた種々の斬新な身体論と対質させる。これによって、西田と田辺の所論が同時代の哲学的思考空間にどこまで深くコミットし、どの点で他には見られないオリジナリティをもつのかを解明していく。

(2)(1)の成果を国内の専門研究者に日本語で発信すると同時に、フランス語や英語で海外での講演会や研究集会で発表する。そして、必ずしも日本哲学の専門家ではない海外の哲学研究者からの反応を吟味し、フィードバックすることによって、本研究のその後の展開へとつなげていく。

(3)以上の研究をさらに「歴史哲学と宗教哲学の連動」という問題系へと結びつけていくために、西田・田辺哲学の歴史的世界論との突き合わせを図るべき仏独哲学側での参照項として、コジェーブに端を発するフランス独特のヘーゲル受容と、身体の問いの欠落に批判的眼差しを向けるフランスのハイデガー受容の流れに注目する。さらに、この両方の流れに直接間接に関わり、研究代表者自身も専門家として親しんできた思想家だという理由から、この時期のレヴィナスとリクールの思索をも活用する。とくに最近続々と公開されてきた彼らの未公刊資料も参照していく。こうした仕方によって、京都学派と仏独哲学の双方の側に、それまでの歴史哲学をラディカルに批判しつつ、絶対的な断絶や転換を強調してそこに救済論的モチーフをたたみこむ新たな歴史哲学の試みを読みとっていく。そして、この両者を交差的に読み解くことで、そうした試みがもちうる哲学的潜勢力と問題性を明らかにしつつ、今日の宗教哲学の諸問題への道筋を切り開いていく。

４．研究成果

(1)田辺のベルクソン解釈について、以前からの研究代表者の取り組みを本研究課題の枠に組みこんで、さらに発展させることができた。具体的には、(a)ベルクソンの晩年の主要著作『道徳と宗教の二源泉』(1932)の精緻な批判的読解を自らの「種の論理」と結びつけた田辺の長大な論文「社会存在の論理」(1934)の内、ベルクソンを扱った章を仏訳し、解説をつけて『*Annales bergsoniennes*』第 6 号に発表した〔5〔その他〕⑦参照〕。そして、それをフランス人研究者たちにも読んでもらった上で、田辺の「社会存在論」が、ベルクソンを介してフランス社会学派の理論や人類学のトーテミズム論へとアクセスし、そこに彼独自のヘーゲル・マルクス受容を重ね合わすことで「種の論理」の端緒を開こうとしていたことを、パリのベルクソンシンポジウムでの講演の際に論じた〔5〔学会発表〕④参照〕。

(2) (1)の研究から、この時期の西田や田辺と仏独の歴史哲学が共有していた問題系として、「社会的なもの」という局面が浮かび上がってきた。そういった観点から、1930 年代のコジェーブのヘーゲル『精神現象学』講義を読み直すとともに、レヴィナスとリクールのこの時期の思索を系統的に調査した。また、田辺の「社会存在の論理」と同年に書かれたシモーヌ・ヴェイユの『自由と社会的抑圧』も、同一の問題系に対する独自な貢献をなしていることを理解するに至った。こうした発見を踏まえて、ベルクソンシンポジウムでの講演原稿を大きく加筆して日本語化し、『日本哲学史研究』に発表した〔5〔雑誌論文〕③〕。また、この関心の延長上で、リクール研究を通して以前から交流のあった J.A.バラーシュ氏（アミアン大学教授）の集合的記憶論をベースにした歴史哲学研究に興味を引かれ、2014 年 11 月に氏を日本に招待した際に、意見交換と討論を行った。

(3) 後期西田の「歴史的世界」論とその宗教哲学との関係について、フランスでの資料調査の機会を利用し、この問題について以前から研究代表者の仕事に継続的に関心をもっているフランスの哲学研究者たちと意見交換を行った。また、この時期の西田に断続的にみられるハイデガーへの言及を網羅的に研究し、その射程が、同時期のフランスにおいて始まりつつあった独自のハイデガー受容と比較することによってよりよく見えてくることを理解するに至った。こうした成果の一部は、2014 年に韓国の梨花女子大学で行った英語講義に反映された〔5〔その他〕④、⑤〕。また、その一部をフランス語にまとめ、雑誌『Cités』 の「宗教と真理」特集への寄稿論文とした〔2015 年 7 月刊行予定〕。

(4)本研究課題全体については、以上の研究全体を総括し、とくにそこから今日の宗教哲学に対する可能な貢献を引き出すという作業は、まだ道半ばであるといわざるをえない。だが、図式的ながらも、この研究の総論に当たる内容は、フランスの哲学雑誌『Philosophie』 の 125,126 号の連続論文で発表することができた〔125 号は 5〔雑誌論文〕②参照、126 号は 2015 年 6 月刊行予定〕。また、こうした課題にフランスの哲学研究者と共同で取り組むための基礎資料として、研究代表者が共編者となった仏語の日本哲学アンソロジーを 2013 年に公刊できたことも、本研究期間中の特筆すべき成果であったといえる〔5〔図書〕①〕。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 杉村靖彦「フィロゾフィー・ジャポネーズという冒険」、『宗教哲学研究』第 32 号、宗教哲学会、査読有、2015、123-129。

② Yasuhiko Sugimura, « Auto-éveil et témoignage – philosopher autrement : l'Ecole de Kyoto encomparaison avec la philosophie françaisepost-heideggerienne» , *Philosophie*, n.125, Paris, Editons de Minuit, 2015, 44-62. 〔査読有〕

③ 杉村靖彦「「種の論理」と「社会的なもの」の問い―田辺、ベルクソン、フランス社会学派―」、『日本哲学史研究』第 11 号、京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室紀要、査読有、2014、38-64。

④ Yasuhiko Sugimura, « Témoins de la Vie, entre le philosophique et le religieux. Relire *Les Deux Sources* du point de vue de l'« après-désastre »», *Annales bergsoniennes VI : Bergson, le Japon, la catastrophe*, 2013, 195-210. 〔査読有〕

⑤Yasuhiko Sugimura, « "Demeurer vivant jusqu'à..." : La question de la vie et de la mort et le "religieux commun" chez le dernier Ricœur », *Etudes Ricoeuriennes / Ricoeurian Studies*, Vol.3,No.2, 2012, édité par Johann Michel, David Scottson et Yasuhiko Sugimura, University of Pittsburgh Press, 2012, 26-37.〔査読有〕

⑥ Yasuhiko Sugimura, « Introduction à la thématique spéciale (Philosophie et Religion chez Paul Riceour) », *Etudes Ricoeuriennes / Ricoeurian Studies*, Vol.3, No.2, 2012, édité par Johann Michel, David Scottson et Yasuhiko Sugimura, University of Pittsburgh Press, 2012, 1-6.〔査読有〕

〔学会発表〕（計 5 件）

① Yasuhiko Sugimura, «La *mimèsis*

reconsidérée. Le « comme » herméneutique chez le dernier Ricœur （韓国(ソウル)・ソウル国立大学での招待講演、2015 年 1 月）

② Yasuhiko Sugimura, 《Vie et Mort entrecroisées. Ricoeur et Derrida 》（日韓リクール研究交流第三回交流会での招待講演、於京都大学、京都府京都市、2014 年 6 月）

③Yasuhiko Sugimura, 《Qu' est-ce que la philosophie japonaise ? / Autour de l' Ecole de Kyoto》（フランス・リール市の文化イベント Citéphilo でのシンポジウム提題、於リール美術館、フランス(リール)、2013 年 11 月）

④ Yasuhiko Sugimura, 《La " logique de l' espèce" et la question du "social" - Tanabe, Bergson, et l' école française de sociologie 》（国際シンポジウム「結びの考察―ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』をめぐって」(Remarques finales. Autour des Deux sources de la morale et de la religion de Bergson）での招待講演、於パリ国際大学都市日本館、フランス(パリ)、2013 年 11 月）

⑤ 杉村靖彦「類比から証言へ―リクールにおける<として（comme）> の変遷からのミメーシス概念再考」（明治大学人文科学研究所・京都セッション「模倣と創造―日本とヨーロッパにおける文化継承の現象学」での招待講演、於同志社大学、京都府京都市、2013 年 10 月）

〔図書〕（計 1 件）
① 〔共編著〕 Michel Dalissier, Shin Nagai, Yasuhiko Sugimura (éd.), *Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps*, Paris, J.Vrin, 2013, 471p.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

〔その他〕
①〔書評〕杉村靖彦「James W.Heisig, *Nothingness and Desire: An East-West Philosophical Antiphony*、(University of Hawai ' i Press)」、『日本の哲学』15 号、2014 年 12 月、133－141。

②〔翻訳〕ジャン・グロンダン『ポール・リクール』、文庫クセジュ、杉村靖彦訳、白水社、2014 年。

③〔翻訳〕ジャン・ナベール『悪についての試論』、杉村靖彦訳、法政大学出版局、2014 年。

④〔講義〕Yasuhiko Sugimura, Life-and-Death: Nishida ' s Philosophy of Nothingness face to Heidegger（韓国・梨花女子大学での講義、2014 年 3 月）

⑤〔講義〕Yasuhiko Sugimura, Philosophy of Kyoto School : General Introduction（韓国・梨花女子大学での講義、2014 年 1 月）

⑥〔翻訳〕Hajime Tanabe, *Ontologie de la vie ou la dialectique de la mort ?*, Traduit et annoté par Yasuhiko Sugimura. In Michel Dalissier, Shin Nagai, Yasuhiko Sugimura（éd.）, *Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps*, Vrin, 2013, 283-314.（田辺元「生の存在学か死の弁証法か」(1962) 第 1 章の仏訳）

⑦〔翻訳〕Hajime Tanabe, *La logique de l' être-social*, chap.3. Traduit et annoté par Yasuhiko Sugimura, *Annales bergsoniennes VI : Bergson, le Japon, la catastrophe*, PUF, 2013, 63-89.（田辺元「社会存在の論理」(1934) 第 3 章の仏訳）

６．研究組織
(1)研究代表者
杉村　靖彦（SUGIMURA, Yasuhiko）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20303795

(2)研究分担者
　無し

(3)連携研究者
　無し